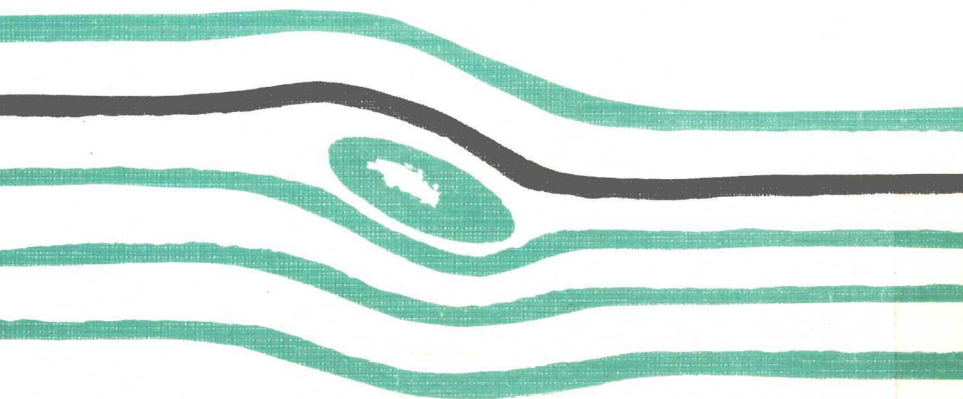


源氏・寝覚・栄花

平安朝物語文学の流れ

松村武夫著

笠間選書 99



笠間書院

松村武夫 (まつむら たけお)

昭和15年 東京都に生まれる。

昭和37年 早稲田大学第一文学部（国文）卒業。

昭和45年 早稲田大学大学院文学研究科（日本文学）修士課程修了。

現 職 都立立川高校（定時制）教諭。武蔵野女子大学非常勤講師。

所属学会 和歌文学会・中古文学会・平安朝文学会

現 住 所 〒190 立川市幸町4-52-1 立川幸町団地19-202

笠間選書99 源氏・寝覚・栄花
——平安朝物語文学の流れ——

昭和53年 7月31日初版第1刷発行

定価 1,400円

—検印省略—

著者 松村武夫◎

発行者 池田猛雄

印刷 三美印刷株式会社

製本 笠間製本所

発行所 有限会社笠間書院

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-46

電話03-295-1331(代) 振替東京1-56002

書籍コード 1391-953099-0924

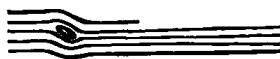
源氏・寝覚・栄花

—平安朝物語文学の流れ—

並木の里シリーズ 1

松村武夫 著

笠間選書 99



笠間書院刊

——並木の里シリーズ——

このシリーズは雑誌「並木の里」に拠る同人の著述を刊行するものである。これによって私どもは、学派にとらわれることなく、研究・創作活動に新しい息吹きと独創性を発揮したいと思う。

『源氏・寝覚・栄花——平安朝物語文学の流れ——』 目次

I 『源氏物語』小論

一 「篝火」巻論	七
二 朱雀院の変貌	一四
三 『源氏物語』と謡曲	二九

II 『夜半の寝覚』論

一 『夜半の寝覚』概説	三九
二 『夜半の寝覚』の構想について	五〇
三 『夜半の寝覚』欠巻部分の構想について	七二
四 『夜半の寝覚』の享受をめぐって	八四
五 『無名草子』における『夜半の寝覚』の批評について	九六

III 『栄花物語』論

一 巻第一「月の宴」について	一一五
----------------	-----

二 卷第二「花山たづぬる中納言」について.....	一四〇
---------------------------	-----

IV 『いはぬし』論

一 『いはぬし』考——道心と風流心——.....	一五九
二 現代語訳『いはぬし』.....	一七三

V 大隈言道論

一 言道の歌論について.....	二二
二 言道の歌について.....	二三八

I
『源氏物語』小論

一 「篝火」巻論

一

「篝火」巻は『源氏物語』中における最も短い巻の一つであるが、強いて段落分けしてみれば、

①「近江君に対する内大臣の処遇」に関する光源氏の感想。

②琴を枕に添い臥しする光源氏の玉鬘への懸想。

③西の対での光源氏・夕霧・柏木・弁の少将の合奏と柏木の玉鬘に対する恋慕。

の三つの部分に分けられる。^(注1)

①の部分は前の「常夏」巻を受けての書出しであって、前巻とスムーズに連続しているが、^(注2)

^(注3)
この頃世の人の言種に、内の大殿の今姫君と、事に触れつつ言ひ散らすを、源氏の大臣聞召して……

という書き出しは明らかに新たに巻を立てた調子である。

さて、内大臣の期待に反し世間の笑われ者になった近江君の話に耳にした光源氏は、この不首尾の原因を「いと際々しく物し給ふ」内大臣の性格に帰せしめ、「深き心をも尋ねず持て出」だした内大臣の振舞いを批判し、「萬づの事もてなしからこそ^{なだらか}穏和なるものなめれ」と述べている。

何事においても光源氏に対抗心を抱く内大臣が玉鬘に対抗すべく見つけ出したのが近江君であつたが、その結果の不如意は、他でもない、すべて内大臣自身の蒔いた種から出来たのである。近江君には内大臣の性格の欠点が集約されており、そうした彼女を内大臣の軽率な心が「深き心をも尋ねず持て出」だしたのであつた。近江君は玉鬘と対照的に構想された滑稽な人物ではあるが、それをこうした遺伝的性格という必然性の中でとらえた作者の用意は非常にすぐれている。

さて、実の父親に対する批判ではあるが、光源氏のことばを聞いていると、玉鬘はいかにももっともだと思ふことが多く、光源氏に保護されている現在の身の有様をむしろ幸福だと思ふようになり、次第に光源氏に心うちとけていった。光源氏のことばにはそうした玉鬘の変化を期待する心ももっていたのであろう。しかし、よく考えてみると、内大臣の行動を批判していながらも、無意識の中にこのことばが光源氏自身に帰ってきて、いつのまにか自分自身に言いきかせているのである。玉鬘への恋慕の情は背後に夕顔を重ねているだけに根強く、光源氏の心の奥底へつながっている。しかし光源氏はすでに物の表も裏も知りつくした中年の男である。自らの情念の直撃をも適当にはぐらかすことができる。内大臣への批判はそのまま自分の理性の無意識のうちでの確認であり、激しく揺れ動く自らの情念を搦手から抑制しているのである。したがって「憎き御心こそ添ひたれど、然りとて、御心のままに押立ちてなどもてなし給はず」という理性的な行動がでてくるのである。ここには、情念によって導かれた行動が頂点に近づいた時、自己と他とを客観視し、自らの行動を抑制し得る中年の理性的な男の姿が見える。①の部分にあらわれた中年者の心底にふすぶる情念とそれに対する理性と

が具象化されるのが②の部分である。

二

②の部分は、初秋の一夜を琴を枕に明かす光源氏の心と玉鬘の姿とが印象深く語られる。父代りと思う光源氏に「やうやう懐かしう打解け聞え給ふ」玉鬘であつたが、光源氏の「憎き御心」にはほとほと困惑してしまふ。今夜もまた例によってやってきては琴を教えようという口実が、いつのまにか口説きにかわっている。玉鬘は光源氏を充分信頼してはいるものの、こうした光源氏の振舞いに「斯かる類あらむや」とうち歎くのであつた。一方、光源氏も玉鬘の信頼しきつた姿をみるともう無理な振舞いはできず、また世間体も考えざるを得ない。退出しようと御前の篝火をかきたてさせると涼しい光に女の有様は実に美しい。

……いと涼しくをかしき様なる光に、女の御有様見る甲斐あり。御髪の手当りなど、いと冷やかにあてはかなる心地して、打解けぬ様に、物を慎ましと思したる気色、いとらうたげなり。帰り憂く思し躊躇ふ。

とある。時はもはや初秋である。初秋の夜に燃える篝火の炎を男の情念と考えることもできよう。あやしき心にせめられながら玉鬘の御髪をかきやれば、御髪の手触りは冷やかで上品である。冷やかな髪の手ざわりは、もしや光源氏の理性がとらえたものではなかったか。目前の女の「物を慎ましと思したる」らうたげな有様に光源氏は心をとらえられるが、光源氏はそこにかつての夕顔の姿を二重写

しに見ているのである。あやしき情念のゆれと冷やかな御髪の手触り。過去と現在とを一瞬に重ねあわせた地点にふとどまり「帰り憂く思し躊躇ふ」光源氏の心底までは、玉鬘には分らない。

絶えず人侍ひて灯し附けよ。夏の、月なき程は、庭の光なき、いと物むづかしく、覺束なしや。

光源氏の心底に秘められている、かつて夕顔を失った折のことが鮮やかによみがえってくる。光源氏の心中奥深く流れていた時間が一度にたぐりよせられ、一瞬に顕在化する。光源氏の心は玉鬘をとらえ、更に夕顔をとらえようとしている。玉鬘を契機として揺れ動いた光源氏の心は現身の玉鬘への愛の成就のみで満たされるものではない。しかし夕顔への思慕は玉鬘によってのみ現実化する。それ故光源氏の玉鬘への愛は尽きることがない。

篝火に立ち添ふ恋の烟こそ世には絶えせぬ炎なりけり

「苦しき下燃」の炎はこの世では玉鬘によって慰められるより他ないのであったが、玉鬘にとっては、「怪しの有様」と困惑するだけで、それをどうできるはずのものでもないのであった。

三

折から東の対の花散里のもとでは、夕霧・柏木・弁少将の三人が集って遊びを始めていた。光源氏の情報によって西の対にやってきた若者たちは、華やかに秋の一夜の遊びを始めるが、それぞれ簾の内の玉鬘に対する思いを持っていた。中でも最も意識的なのは柏木であり、よう演奏することもでき

ないほどであった。

これが③の部分である。前半の心理的な陰翳の濃やかな場面からうってかわって華やかな場面に変わるが、ここでは音楽が非常な効果を發揮しており、前半の光源氏のふすぶる情念も後半の音楽によって浄化されている。

さて、演奏の始めにあたって緊張した頭中将（柏木）は声が出ない。

頭中将心遣ひして、出し立て難うす。

とある。光源氏が「遅し」とせめると、とっさに弟の弁の少将が代わった。

ここには後の柏木の悲劇が暗示されている。この兄弟の性格の違いがそのまま、柏木は死へ向かい、弁の少将は後に紅梅右大臣になって繁榮するという後の運命を必然的にしているのである。すでにこの時、作者の構想はすくなくとも「若菜」巻上下、「柏木」巻ぐらいまでは完成していたものと思われる。

柏木兄弟だけではない。光源氏を除く四人はすべて若者である。そこには光源氏の次の世代の世界が暗示されている。

これに対して光源氏は玉鬘を通じて過去の世界をたぐり寄せていた。玉鬘に夕顔を重ねあわせることによって、光源氏は自分の青年時代を引き寄せることもできた。しかし、今、これらの若者たちの出現によって、光源氏は中年の自分自身を見出し出している。目の前で演奏する頭中将の琴は、かつて共に遊び歩いた内大臣の爪音にそっくりである。玉鬘は、これらの若者たちにこそふさわしい。遠く

自己の青年時代を透視しながら、光源氏は今、中年者となった自分を見ているのである。時は初秋である。人生の始秋に立つ自分と未来を持つ華やかな若者たちと。

簾の中に、物の音聞き分く人物し給ふらむかし。今宵は盃など心してを。盛り過ぎたる人は、酔泣きの序に忍ばれぬ事もこそ。

「忍ばれぬ事」とは柏木兄弟と玉鬘との関係について言われたのであるが、しかし、「盛り過ぎたる人」と自らを提示した光源氏のこの口振りには、若者たちの将来を透視しつつ人生の初秋に立つ男の心がしみじみと感じられるのである。

四

こう考えてくると、「篝火」巻は終始光源氏の心が描かれているようである。初秋の日常生活の中で、ふと人生の初秋を実感して、過去と未来とを透視する光源氏の姿がある。光源氏を玉鬘から遡って夕顔に至らしめたものは、やはり人間の情念であろうか。初秋の夜に燃える篝火は印象的である。盛栄する六条院を中心として繰り上げられる生活は光源氏にとって多分に社会的であり理性的な世界である。それに対して玉鬘によって誘われた情念の世間は時空を超えている。しかし勿論、光源氏の理性はからくもそれを押えつけてしまう。しかし、そのわずかの隙間に、日常生活の中では覆い隠された人生の真実を実感し、しみじみと初秋を感じるのである。

「篝火」巻はやはり光源氏の心で終始していると考えたい。

注1 古典文学大系本（岩波書店）の分け方と同じ。

2 「前巻は内大臣と近江君の交渉が描かれて終ってゐるので、この巻ではそれを受けて書出されている、長篇物語らしい筆である。」（村井順博士『源氏物語論上』六二〇頁）

3 本文は岩波文庫本（島津久基校訂）による。

二 朱雀院の変貌

一

『源氏物語』に登場する数多くの脇役のうち、光源氏の兄宮である朱雀院の存在は「桐壺」巻における登場から卷三十九の「夕霧」巻に到るまでであって、「夕霧」巻以後、「御法」巻、「幻」巻の二帳で光源氏の物語が終わることを考えあわせると、途中多くの巻々には記述がなかったり、記述があってもほとんど名前ばかりの登場でしかない場合も少なくないが、それでも光源氏に影のようにそっている朱雀院の存在はやはり軽視することができない。そこでこの論稿では『源氏物語』における朱雀院の位置・役割を考えて、朱雀院がどのような人物として設定されているか、またその設定に一貫性があるかどうかを検討し、そこから優柔不断で強い個性を持たず、われわれにとってなにか魅力の乏しい人物としてうつる朱雀院の姿のよってくるところをも説明しようというわけである。

ところで検討の個所であるが、それには次の三カ所が考えられる。

I、「桐壺」巻。

II、「賢木」巻を中心とする巻々。（「紅葉賀」巻から「落標」巻まで）。

III、「若菜上」巻を中心とする巻々。（「若菜上」巻から「夕霧」巻まで）。

このうちⅢの女三の宮をめぐる事件については、先学のかなり多くの詳細な論稿があるので、ここではⅠⅡについてだけ述べ、Ⅲについてはまた稿を改めて考察したいと思う。

なお朱雀院の呼称は、一の宮・東宮・朱雀帝・朱雀院と変化するわけであるが、ここでは混乱のないよう讓位以前も朱雀院と呼んで統一する。

二

朱雀院は桐壺帝の第一皇子で、光源氏より三歳年長の兄宮である。七歳で立太子、二十三歳で即位して朱雀帝となり、三十一歳で讓位して朱雀院となる。母は右大臣の娘である弘徽殿女御で、右大臣家の権力を生みだす中心人物といえる。『源氏物語』第一部前半では、朱雀院の後見であるこの右大臣家と光源氏の後見役となる左大臣家との対立確執が政治的社会的背景となって物語が進行してゆく。例えば光源氏の元服の引き入れ役を引き受けた左大臣は、自分の秘蔵の娘（後の葵上）を光源氏に奉る。その意図は、

引入の大臣（左大臣）の、みこ腹にただひとりかしづき給ふ御女、奉宮（朱雀院）よりも御けしきあるを、おぼし煩ふことありけるは、この君に（光源氏）たてまつらむの御心なりけり。（注）「桐壺」

（巻）

とあるように、右大臣に対抗しようという左大臣の政略的な動きであって、朱雀院、光源氏の兄弟は左右大臣家対立の渦中に存在することになる。